

大須賀隆子（著）  
『子ども主体の造形表現への変革—宮武辰夫の〈生きもの〉思想を土台とした方法  
論〈全身のスクリブル〉と実践—』

2023年 溪水社 A5判 340頁 定価（本体5,000円＋税）

森 志津\*

著者は、保育の要となる視点を、浜口（2018）の「子ども自身が興味を持ってやり始め、遊びの中で試行錯誤しながら、身体表現や造形活動が生起していくプロセス」（p.1）や「子どもが自分の気持ちや考えを自由に表現し、自分らしさを発揮すること」（p.1）という論考に求めている。タイトルにもある造形表現への関心は、著者が若き学生時代から温め続けてきたものであり、今回、幼児美術教育実践家である宮武辰夫(1892-1960)の方法論と実践を綿密に調べ上げることで、子ども主体の造形表現の真髄を明らかにしようとした。特に1950年代に着目した。宮武が、取り入れた理論及び日本の幼児美術教育の推進の経緯を明らかにすることは、遊びや自分らしさが大事にされる保育を考える上で、示唆を得ることができる。

本書は、お茶の水女子大学に提出された博士論文をもとに、加筆修正したものである。1950年代における幼児美術教育を子ども主体の造形表現へと変革した宮武辰夫の方法論と実践について考察したものである。彼は、戦前は原始芸術探検家として活躍し、戦後は幼児美術教育実践家として活躍した。彼の業績を振り返ることで、戦前から戦後にかけての日本の幼児美術教育のありようが明らかにされ、現代の保育へとつながる道筋が見えてくる。

構成は、序章と終章を加え、全6章から成る。序章では、研究の背景と目的が示されている。1950年前後の保育の状況から、宮武の行なった美術教育を年代順に示している。ここで筆者は、2つの先行研究から、5つの問いを立てる。(1)遊びと言う方法 (2)発達論的視点 (3)精神分析的視点 (4)創美の視点 (5)前衛芸術の視点である。これを明らかにするために、宮武に関する書籍や新聞記事、雑誌記事、映像記録、論文等を丹念に収集し、分析材料としている。さらに、宮武に関わった5名の人物へのインタビューを実施している。著者は、この資料を一つ一つ丁寧に解きほぐしながら宮武像に迫っていく。

第1章では、宮武の戦前と戦後を貫く美術教育思想について明らかにしている。ここでは、宮武の幼児美術教育実践を集大成する作品である、巨大遊具《シャートレー》を〈白い生きもの〉と呼んだところから、生きもの概念を手がかりにしている。まず、明治期末から大正期にかけて宮武が学んだ東京美術学校とその周辺で起こった出来事について紹介している。次に、卒業後の原始芸術探検と戦後すぐの活動について詳細に述べている。さらに、設計施工した《シャートレー》について紹介している。子どもたちが、《シャートレー》で思う存分遊ぶことによって、内なる〈生きもの〉性が発揮され、全身の流動やダイナミズムが生成されていき、無形の具象が、脳心(=心身)に蓄積されていくことを目指したのである。つまり宮武は、〈生きもの〉性を育むことを幼児美術教育の出発点だと考えたことが示唆された。

第2章では、宮武が依拠した理論家三人を取り上げ、その意義を検討している。ルース・ショーのフィンガー・ペインティングとグレッツィンゲル及びフローレンス・ケインのスクリブルである。ルース・ショーは「子どもは、自分自身の体験から自由に学ぶべきであり、意識的な努力をしなくても扱える簡単な用具を用いて、知っていることを遊びのなかに表現すべきである」（p.64）という教育思想のもと、フィン

\* 小田原短期大学通信教育サポートセンター（横浜） 特任助教

ガー・ペインティングを創案した。グレッツィンゲルは「子どもの絵画的創造性は、生得的に子ども自身の心身に埋め込まれて」(p. 103) いるという思想のもと、スクリブルは「『水棲動物』が、陸上動物に生まれ変わる際の衝撃と、陸上に適応するための『外界との相互交渉』の過程における身体感覚記憶の軌跡」(p. 102) であると述べた。フローレンス・ケインによると、スクリブルは「生得的に潜在している創造力を子どもの身体に呼び覚ますための解放のエクササイズ(運動)」(p. 110) であるとし、その実践において「抑圧されていた無意識領域に押し込められていた欲望が意識化(描出)されて精神的浄化が起こった」(p. 112) と述べている。

第3章においては、宮武の幼児美術教育方法論の開発と展開を述べている。最初に、宮武独自の幼児美術教育方法論の開発事例として粘土工作を取り上げ、次に宮武独自のスクリブル論を取り上げ、その方法論の生成過程を検討し、その事例について考察している。さらに宮武が幼児美術教育方法論に、なぜ身体全体の行為である遊びスクリブルを取り入れたのか、その理由を明らかにしている。

第4章においては、1959年に刊行された『児童画評価シリーズI』に着目して、宮武の幼児美術教育方法論の成果について述べている。感覚・感情主義派の宮武と認識主義派の交差するところが、創美論争に代表される1950年代後半の児童画をめぐる混乱の局面を打開する方向性であるという。第一に、幼児画の評価は、幼児の生育歴と合わせて評価を試みることである。第二は、主義主張が異なっても、よいと評価される児童画が始めに興味関心という感情的な意欲や契機があり、子どもの感覚や感情が表現したい対象に生き生きと結ばれていることが、表現の始まりであるという共通理解であると示唆している。

終章では、結論と意義が述べられている。宮武は、子どもの生活や遊びのなかから表現が生まれるような造形活動へと変革をもたらした。その変革の方法論が〈全身のスクリブル〉であった。スクリブルは、大人からの教え込みや型の模倣をさせなくても、創造性を〈生きもの〉の本能のように内在させている存在であると考え、生得的な創造性は、1歳前後から始まるスクリブル(搔画・なぐり描き・錯画・ぬたくり・いじくり・こねくり)にあると考えた。宮武は、アーティスティック・プロセスの始まりであるとするスクリブル論から身体全体で生活し遊ぶこと自体が造形表現の始まりであるとする幼年幼児美術教育論へと発展させ、造形表現の方法論を創出したことが明らかとなった。

さらに本書の特徴として、補論が追記されていることが挙げられる。ここでは3歳未満児の絵を通した保育カンファレンスが紹介されている。実際の実践例が取り上げられ、カンファレンスの様子が手に取るようにわかる。最後には、著者の指導教官である浜口順子の論考が載せられている。「絵」の「え」という音は、「出会う」という意味があり、絵は、描いている人も周りの人も子どもを育てている人もみんなを含めたものが融合している。つまり、絵を通して関係を作り直せるのではないかと提案するのである。著者は、絵を通して宮武と出会い、宮武と関係の深い人と出会い、子どもが描いた絵とじかに出会うことを通して、造形表現の真髄への接近が可能となったといえる。また巻末に掲載された宮武の年譜と関連年表は、先行研究を踏まえ整理されたものであり、今後の宮武研究において貴重な資料となり得るだろう。

本書は、著者が中学生の時から長い人生を通して興味と関心を抱き続けた美術及び美術教育における問題意識を一人の美術教育実践家に着目し、労を惜しまずデータ収集に当たった成果である。膨大なインタビューと貴重な資料の数々を分析対象とし、幼年美術教育の新しい可能性を拓いていったと言える。このAI時代において、身体全体を使った美術教育方法論を提示した宮武の仕事と思想は、今後ますます注目されていくだろう。本書は、美術教育に携わる多くの実践家や研究者にとっての道標となると予想される。

これは幼児に限らず学年が上がっても、その根底には身体全体を使った遊びと生活が基本にある〈生きもの〉としての美術教育があることを思い知らされる。また、美術教育に関わらず、表現に関わるあらゆる分野の中で、宮武の方法論と実践は、示唆に富むといえよう。大須賀の幼児美術教育への熱意が明らかにした宮武の方法論と実践が、今後も美術教育の中で生かされていくことだろう。広く読まれ語り継がれていく著作であると考えられる。本書は、専門分野以外の人にもわかりやすい平易な言葉で書かれ、多くの事例結果も写真とともに提示されている。一読をお勧めしたい。